

〔目的〕 近年流行したタイトスカートはゆとり量の少ないスリムスカートであるため、スリットが設けられていても、着用中のつれじわやスリットの明止まりの破損、変形、しわ等の表出が観察された。シルエットを重視した衣服選択によるゆとり量の動作不適合が原因であるが、後面に発生するこれらの現象は着用者には認識しがたく、外観の印象を損なう結果となっている。本研究ではタイトスカートの動作による布およびスリット明きの変形を量的にとらえ、スカートの形状変化と裾のゆとり量との関係について検討した。

〔方法〕 実験に用いたスカートは、丈は脛骨点までとし、スリット明止まりは裾から10cm上とし、裾幅を腰部寸法（腰囲+6cm）と同寸、腰部寸法-4cm、腰部寸法-6cmである3種とした。測定は普通歩行におけるスカート後面の変形様相をビデオ撮影し、両足が揃った位置から開脚し最大歩幅になるまでの、スリット明止まりを中心として発生するしわの長さ、角度、スリット明きを測定した。また、同型の編布のスカートの着用実験により、最大歩幅時の布の変形量も測定した。

〔結果〕 歩行時の後面の形状変化はスリットの開放とスリット明止まりを中心として発生する放射状のしわである。裾幅が少となるほどスリット開放量は大きくなり、しわの長さは長く、しかも後中心線となす角度は大になるため、しわの印象は顕著になる。また、布の変形量はスリット明止まりより上方で、裾のゆとり量の影響が大であり、明止まりから前方に出した脚側にかけては応力集中がみられ、特に布の変形が大である事が確認できた。